アメリカの詩人ホイットマン（Wait Whitman—1819-1892）

彼は十一歳で，小学校を退いて以来，法律事務所での走使，印刷所の接字工，小学校の教員，新聞記者，官庁の書記等，転転と職業を変え，一度も家庭らしいものを持つことなく，貧困と孤独の中でその一生を終わった。一八四〇年に彼が書いた随筆の中で言う。

私はロウファー "loafer" が好きでたまらない。あらゆる人間の中で，あの生え抜きで，いつも変わらないロウファーに匹敵するものはないのだ。さて私がここでロウファーと言うのは，本格的に， "のらくら者" のことであって，今日十二時間も働きかと思えば，明日は何もしないで，ぶらぶらするような，そんな気まぐれの意欲者を指すのではない。私が求めるものは，ゆったりと落ち着いて，いつも変わらぬ哲学者風の無精者なのだ。昔の哲学者達は皆ロウファーであった。ディオゲネスを見たまえ。彼は樽の中に住んで，偉大なロウファー一家の本当の子孫で振舞ったのだ。

備考：ディオゲネスは古代ギリシアのキュニク派の哲学者。上記の通り樽の中に住んでいたという。キュニク派とは，ギリシア語のキュニコス（犬のような）から出た語で，犬儒派と訳されている。彼等は，世俗的な権威，価値，習慣，形式等を勇敢に無視乃至超越した。そして，反文明的，反俗世間的生存を維持した。当時ギリシア全土を征服して，正に意気揚挙，地上最高の権力者となったアレクサンドロス大王は，ディオゲネスの評判を聞きつけて，是非会ってみたいものと思った。ところが，この "樽の中の聖者" は大王の招きに応じない。そこで，大王自ら出向いて行った。ディオゲネスは，その時おそらく樽の中で，日新たぼっこを楽しみながら，衣服についている風が鳴るでも取っていたのであろう。

「わたしは，アレクサンドロスだ。あなたが，何か，私にして欲しいことは無いであろうか」

大王の好意的な質問に対して，哲学者は答えた。

「傍へ逝いて下さい。日が，陰るから」と。

その帰途大王は，嘆息一頻の後で，「もし私が，アレクサンドロスでなかったら，あのディオゲネ
スになりたかっただろう」と噂したとのことである。

この時の大王が受けた大きなショックは、複雑なものであったようだ。大王は、「権の中の居住者」は、それが聖者であろうが哲学者であろうが、定めし、手もと不如意を託っているに違いないと思っていた（事実、全くその通りであったろうか）。自分は、大王であっても（又はそうであるから却って）それが不可能な、何事にも何人も拝謁されることのない壇中ならぬ、壇中の天で、自由瀕達な境涯を享受しているらしい哲学者を発見した。もし自分が大王でなかったならば、あなたに振舞って見たいものだと、ディオゲネスを褒んだとしても、不思議ではないであろう。そこでは、前述の様に、最高の権力者でも、一個の日照像？の侵害者を止めて目されているのである。

以上の様なディオゲネスを、ロウファーの代表的人物として憧れていたらしいホイットマンの、唯一の詩集が「草の葉」（Leaves of Grass）である。1855年に出した初版は、12編の無題詩を含んだ95、6ページの小冊子であった。彼が世を去った1892年までに、9回版を重ねたが、その度ごとに、改筆、増補、削除を行うない、現在流布しているものは、4百編余の大部の詩集となっていいる。初版の巻頭長編詩（後にSong of Myself）“私自身の歌”と題したは、彼の代表作である。

ハーン先生のホイットマン論（東京大学における講義の摘録）

私が正直に諸君に告げなければならない事は、非常に偉い人々が、私の言わんと欲する事（ホイットマンについて）と全然反対の見解を取っていると言う事である。——「草の葉」に対する先生の攻撃は、単にこの詩集に対する酷評の代表的なものであるのみならず、その作品の短命を、誤って予言したものとして、「偽評噴噴」であるという（既述）——エマスン（Ralph Waldo Emerson—1803—1882）はホイットマンの書いたものは、米国で産まれた文学と思想の中で、最大のものであると言った。英国では、大詩人大評論家スインバーン（Algernon Charles Swinburne—1837—1909）は、単に大思想家大詩人としてホイットマンを誉めたばかりでなく、大層立派な頌（ode）の中で、次の様な詩句を以て呼びかけている。

O strong-winged soul with prophetic
Lips hot with the blood beats of song,
With tremor of heart-strings majestic,
With thoughts as thunders in throng,
With consonant arords of chords
That pierce men's souls as with swords,
And hail them hearing alone.
彼の著書については、次のように言っている。

Sweet-smelling of pine-leaves and grasses,
And blown as a tree through and through,
With the winds of the keen mountain-passes,
And tender as sun-smitten dew;
Sharp tongued as the winter that shakes
The waste of your limitless lakes,
Wide-eyed as the sea-line's view.

以上は、偉い人からの大謹拝である。ホイットマンを熱心に愛した詩者が、他に多数ある。それらの名の目録は諸君（東京大学の英文科の学生達）を愕然としめるだろう。ここに一つの珍しい事実がある。彼を愛した人々で、この様々な称賛を肯定すべき何のかを引用し得た人は一人もいない事である。又一方で、彼は、宗教的な人物や、風説をたずさる隠の偏見に逆らったために、彼等から猛烈、不寛口を浴びせられた。別証の才能を有する人で、彼を侮辱することも、誓めることもなくて、その真相を語り得たのは、恐らくはただ一人だろう。その人は、ゴッス教授（Sir William Edmund Gosse—1849-1928）。—イギリスの詩人、評論家、大英博物館司書等を勤め、ケンブリッジの教授にも立った。

私が、ゴッス教授の名を挙げたのは、私の取る立場に対して、幾分の弁明を与えるためにからである。私の立場から言えば、彼についての一切の称賛は、全く無意義であって、彼の上に浴びせられた悪口も同じく無意義である。彼は誓められたにも、悪口を言われるにも値しかなかった。しかし、彼は多大の労苦を重ねた。彼の名声感化の大部分は、彼に加えられた粗猛な批評によって挑発せられた反動によるのである。

第一に彼が成し遂げたことを考察して見よう。私は敢て言う。彼は詩と言う名に値する、いかなる物をも成就していないのである。彼は一冊の書物を書いた。それだけに過ぎない。その書物は詩で書かれていない。その書物は散文で書かれていない。或る書物が詩でなく、散文で書かれていない場合には、それはあらゆる国語における、一切の文典に反して書かれているに相違ない。彼の書物は全くその通りである。あらゆる正確な表現の、作詩の、散文構造の、良好な趣味の、法則に従って書かれているのである。それだから、私は凡て、それは拙劣な美文であって少しも文体を成していないと言う事を諸君に告げたい。

称賛と批難との間の巨大な落差

以上ハーン先生の、ホイットマン論を摘録して来たのであるが、先生の攻撃は、正に完膚無き
Excerpts from (Song of Myself)

I celebrate myself, and sing myself
And what I assume you shall assume,
For every atom belonging to me as good
belongs to you

Stop this day and night with me, and you
shall possess the origin of all poems,
You shall possess the good of the earth and
sun,
(take of millions of suns left.)
You shall no longer take things at second or
third hand, nor look through the eyes of the
dead, nor feed on the spectres in
books,
You shall not look through my eyes either,
nor take things from me,
You shall listen to all sides and filter them
from your self.

I am the poet of the woman the same as the
man,
And I say it is as great to be a woman as to
be a man.
Walt Whitman, a kosmos, of Manhattan the son,
Turbulent, fleshly, sensual, eating, drinking and breeding,
No sentimentalist, no stander above men and women or apart from them,
No more modest than immodest.

I believe in the flesh and the appetites,
Seeing, hearing, feeling are miracles, and each part and tag of me is a miracle.
Divine am I inside and out, and I make holy whatever I touch or am touch’d from,
The scent of these arm-pits aroma finer than prayer, This head more than churches, bibles, and all the creeds.

I am not the poet of goodness only, I do not decline to be the poet of wickedness also.
What blurt is this about virtue and vice?
Evil propels me, and reform of evil propels me, I stand indifferent.

Who goes there, hankering, gross, mystical, nude?
How is it I extract strength from the beef I eat?
What is a man anyhow? what am I? what are you?

I know I am deathless,
I know this orbit of mine cannot be swept by a carpenter’s compass.
I know I am august,
I do not trouble my spirit to vindicate itself or
be understood,
I see that the elementary laws never apolo-
gize.
I exist as I am, that is enough.

Has anyone supposed it lucky to be born?
I hasten to inform him or her it is just as
lucky to die, and I know it.

I pass death with the dying and birth with the
new-washed babe, and am not contained
between my hat and boots.

I know I have the best of time and space, and
was never measured and never will be
measured.

I tramp a perpetual journey.

I have said that the soul is not more than the
body.
And I have said that the body is not more
than the soul.

And nothing, not God, is greater to one than
one’s self.

Nor do I understand who there can be more
wonderful than myself.

Why should I pray? why should I venerate,
and be ceremonious?

私は尊いものと、心を得ている。私は敬て私の弁
護を試みたり、あるいは理解を求める僅な労
を取らない。
私は宇宙の基本的な法則は、決して弁明しない
ことを知っている。私は有りのままに存在し
ている。それで十分だ。

世に生まれたことを幸福と思っている人ある
か。
私は彼または彼女に急いで告げる。死ぬことも
同様に幸福なのだ。そして、私はそれを知っ
ている。
私は臨終の人と共に死を通り、新しく洗練され
た赤子と共に生を通る。そして、私の帽子と
靴の間に介在してはいない。

私は時と場所の極上等のものを持っていて、決
して測量されたこともなく、されることもな
いであろうと、私は心得ている。
私は絶え間なく徒歩の遍歴を続けている。

私は魂経は肉体に優っていいないと言った。

また私は、肉体は魂経に優さっていないと言っ
た。
それから、かけるるものも、神でさえ、人間の
自我よりも偉大なことはない。

それから、私自身以上に驚嘆すべきものがあろ
うとは思わぬ。

何故に私は祈禱を捧げねばならぬか。何故に私
は尊崇し、たまた儀式を守らねばならぬか。
根本重照：小泉八雲のことども（続き）

I find no sweeter fat than sticks to my own bones. 私自身の骨に付着している物以上に、甘美なる脂肪を私は発見することができぬ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

これを読んで後に、私が最初に自分に向かって発する疑問は、「これは詩であるか」ということである。確かにそれは詩ではない。その点については、何等の異論も有り得ない。……

私は諸君がその中に十九世紀哲学の思想を現わそうとする、作者の真の努力を発見するだろうと告げねばならぬ。私は只単に厳密な意味の進化哲学のみでなく、エマスン及びカーライル（Thomas Carlyle—1795-1881）によって吐露されたような個人主義哲学をも指すのである。

これらの三つの新思想の形式が、ホイトマンの頭脳の中で近く混じった。そして、彼の詩作の企は、その結果を語ろうとするそれであった。

彼の中に存する一切の善いものは、他の何人にも亦存在すると彼が喝破したのは、人生の渾一という新思想が真実であることを彼が感得したことを意味している。彼は無聖であると言い、彼自身の体臭は祈禱や宗教よりも優っていると言ったのは――甚だ卑俗な言い方ながら——彼自身は永久的で、只単に霊魂として永久的なばかりでなく、肉体として永久的だと言じていることを語ったと過ぎない。恐らく彼はドイツの永久的循環の学説を聞いたことがあるだろう。――それは、一度起こったことは、再び起こらせならばぬこと。まして総て存在しているものは、過去において幾百万回も存在したたかつがあって、将来にても、また幾百万回も存在するだろうという奇説である。この哲学には幾つかの形式があって最近のものは、ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche—1844-1900）の哲学である。この学説には幾分の真理があるけれども、スペンサー（前出）及び他の思想家によって、同一という点については不可能だと考えられている。私が意味しているのは、こうである。全宇宙が交互に現われたり、滅んだりすると信じるのは、科学的であるが、新しい宇宙は、一つ一つ以前のものと全然同一だと信じるのは、科学的ではない。彼が自自己的神聖のことを述べているのは、次のような意味である。則ち、彼は肉体としても、永遠の物質の一部である。だから、彼はただ価の間接れたに過ぎない宗教や信仰よりも一層神聖なのである。彼が肉体と欲求を尊敬すると言ったのは則ち、私達がこれらのものを抑制しなければならないにせよ、これらは僅にそのもの自体が善いばかりでなく、人間にての必要部分なのである。彼は禁欲主義に対して粗野な反抗を試みているのである。だから、彼は憤深くもなく、憤がないのでもないと言っている。彼の意味は、次のようだと私は考える。則ち、真に理性的な人にとっては、人の行為を区別するために、このような言葉を使用する必要はないのだ。憤がないというのは、全く馬鹿らしい事であるが、あまり憤深いのも、また馬鹿らしい。彼は出来る限り力強く意見を示したいのである。「徳と悪について、この突拍子な叫びは何事だ」と言っている。その意味は、次の通りである。理知明晰な人から見れば、この世に悪が存在するのは、
必要と思われる。何故なら、悪がなければ善もなく、誘惑がなければ、徳もなく、苦痛がなければ、楽も少なく、闘争がなければ進歩もないからである。諸君は以前にこの哲学を聞いたことがあるだろう。ホイットマンは、善の詩人たちと共に、悪の詩人たちを欲すると言っている。また彼は、人間は自身において一つの宇宙——哲学者の所謂、小宇宙——であると言う教訓を読んで、影響を受けたと述べている。彼は現在小宇宙だから、従来いつもそうであったし、将来いつものようにみようと思うと信じている。カーライルの如く、彼は自己を無限界の一部であると認め、従って神聖だと信じている。彼は自己的確信を非常に無器用に、粗暴に吐露して、狭量な人物の宗教的感動を僕がたしめるようにする。だから何故に私は祈願を捧げなければならぬか、何故に私は尊崇し、また儀式を守らなければならぬか」と質問している。彼より一層博大な思想家ならば、形式や人生の習慣もまた永遠的事物の一部であるという事を認めたであろう。実際他の個人では、彼もその域に悟り得たことを示している。"私自身の歌"によって、彼は精神的自由の最初の歓喜——古い形式的の思想に対する人間の始めての反逆——を現わしている。彼は様様の新思想を寄せ集めて、怪物を極めている。しかし、私達は大抵その由て来る處を識別することができない。彼が生死同趣と述べているのは、西洋人にとっては珍しくても、東洋人には非常に熟知された思想を吐き出している。彼は、東洋の書物まで行かなくても、エマスンからその思想を得たかもしれませんし、カーライルから得たのかも知れない。しかし、私達は、彼が印度の吠陀哲学や仏教の訳書を読んだことを知っている。かかる種々の思想を混ぜ合わせた場合には、その結果は絶分驚くべきものであるが、多少忍耐して読んで行けば、大抵彼の意味はわかるものと私は考える。（以下省略）

1883年8月。ニューオーリンズ（New Orleans）にて、オコンナー（William D. O'Connor）

宛の手紙

ハーン先生からの上記の手紙の中で、ホイットマンに関係のある部分を採録して見よう。

貴方の美しい小册子は、私の書屋の“草の葉”の刊本への貢い補導のようなものであった。私はホイットマンを心密に喫愛していた。そして両度となく、公の印刷物にして私の意見を発表したいと思ってもみたのでした。しかし新聞紙では、これは容易に出来ることではありません。普通の新聞紙で腹藏なく彼を讃賛する事は出来ません。新聞紙の著者達は、その新聞が、立派な家庭に入れることを忘れないようにと常に申します。かれこれ議論でもしょうものなら悪徳文学をよくのは怪しからぬと言います。新聞業は本当に文学業ではありません。今日の新聞記者は、どんなことでも務めてやることを辞さないように余儀なくされています。（中略）

あの詩人の著作に、私は貴方が与えられるような高い評価を置くことが出来ようとは思いません。尤も貴方の批評眼の優越に関しては、私の心に少しの疑いもありませんけれども。天才者が第一線上立つためには、単なる創作力以上の大きな特質を持っていなければならぬと思います。
根本重熙：小泉八雲のことども（続き）

創造した物は美しくなければならない。材料が豊富であっても、それは私を満足させません。粗末や磨かない宝石では満足出来ません。精鍊され、そして不思議な奇妙な形に細工した黄金が見たいのです。磨いては表面のパラの花となら、或いは、ギリシャ彫刻の巧妙を以て裸体の惚惚しい無垢な婉態を変えた宝石が見たいのです。ホイットマンの黄金は粗末の狀態と思われます。彼の金剛石や翠玉は磨かない狀態と思われます。——“Whitman’s gold seems to me in the ore: his diamonds and emeralds in the rough”——彼の偉大な詩の巨浪の轟音がなかったら、大洋の調音の合律性を持つ彼の歌の完全な抑揚がなかったら、ホーマーは私達にホーマーであるでしょうか。私は、そうではないと思います。そして古代文学の巨人達は芸術の厳粛な技に従って、彼等の詩行を磨きはありませんでしたか。彼等の用語を鋳りはありませんでしたか。ホイットマンの声は実際巨人のそれです。しかし、それは火山の下の巨人の声で——なかなか息を止め、なかなか声を出し——調節が出来ないために、ここぞと思ふ時分に吹え声を上げているように私には思われます。（中略）

貴方は彼を詩人と呼びました。そうですね。彼は詩人です。しかし、その詩人の歌は、野蛮な古代の北欧詩人、又は深林のドルイド僧の即興的作物のようなものです。思想は宏大です。言葉は偉大です。しかし、呂律は無茶で、耳障りで、ぞんざいで、原始的です。偉大な作物が従来するように、それが永続しようとは私は信じません。——“I cannot believe it will endure as a great work endures.”（前出）——その詩人は創造者だとは思えません。前駆に過ぎません。（以下省略）

以上ハーン先生のホイットマンについての、東大での講義の大要と、オコンナー宛書簡の該当箇所の一部を採録してみた。それでも粗糲記述することになったが、同先生の同詩人に対する批評の趣は、前出の“Whitman’s gold seems to me in the ore: his diamonds and emeralds in the rough”のところであろう。某評者は言う「この詩集（草の葉）はアメリカ詩の清冽な源流を形成するばかりではなく、自由濁達なアメリカ精神の代表的表現である」。他の批評では「ホイットマンがアメリカの民主主義を文学の世界に導入して、これを観的に具体化するとともに、革新的な無韻の詩を創造して、近代自由詩の基礎を確立した功績は、特筆に値するものであろう」と。共に傾聴すべき卓見であるが、上記の触との間に、前記のような巨大な落差や遠和感は最期無かろうと筆者には思われる。いや、それどころか、該詩人の長所と短所を併せて剔抉した名言であるだろう。

注：前出アレクサンドロス（Alexandros III—前356—前323）……ギリシャ式呼称、アレクサンドー大王（Alexander the Great）……英語式のそれ。マケドニア王でギリシャ、エジプト、アジアにまたがる大帝国の建設者。（未完）
参考文献

小泉八雲全集：（第一巻） アメリカの作者たち／ハーンの世界：（田代三千穂著）